

はにい

蜘蛛の糸

平成24年7月19日

これが、^{やなぎわたり}柳渡先生の普段の授業の様子です。教師と生徒と一緒に読むことを楽しんでいます。

今日は、4つのグループに分かれて対話しています。中学3年生の国語。読んでいるのは芥川龍之介『蜘蛛の糸』です。



ファシリテーター役の子が仕切っています。

「それはどういう疑問？」

「蜘蛛の糸が垂れてくるところでさあ、『蜘蛛の糸がまるで人目にかかるのを恐れるように』ってあるでしょ。これ、なぜ恐れているの？ってことが疑問。」

「ああそうか、糸が自分で恐れるわけないってことか。」

記録役の子が、どんどん太いペンで、テーブルいっぱい
の大きな紙にキーワードを書き込んでいきます。色の使い
分けも慣れたもの。根拠となる本文は緑で書く。



本文を何度も読み返す子どもたち。教師も対話に加わり
ます。

——そもそも、この糸は御釈迦様が垂らしたんだよねえ。

「そうか、御釈迦様はかんだただけを助けたかったんだよ。だから、人目を恐れる。」

「え？でも、だったら、他の人がのぼってきたときに切ればよかったのに。」

「ちょっと待って、この糸は、何かの比喻なんじゃない？」

「比喻？」

「糸が切れる場面で、『断れました』っていう漢字を使ってるじゃない。」

「切れましたじゃないねえ。普通『切れました』だよな。」

「あえて、この字を使ってる。」

——なるほど！じゃあ、この『断』っていう字は普通はどのような言葉で使うか、ちょっとここに並べてみていいかな？言ってみて。

教師が夢中になってしまう対話。本文にこだわり、細部を追究し、物語の全体を行き来する読み。

このあと、クラス全体になり、今度は教師がファシリテーターをやってこの作品の本質に迫っていきました。

あとから、学習後の生徒のまとめ文を送っていただきましたので、いくつか抜粋します。

